

外郎次話  
國紀聞  
全

ル 2  
1244



門 1244  
卷

112

蓬萊茶  
外國記

外國叢書

二十

蓬萊茶書  
外四紀誌



外國叢書

二十

大田南畝  
蓬茸叢書

蓬茸叢書



五郎次話

江戸 浦野元周 輯

エレガノフ 原三三三作 セ子ラールといふ官をきみて日本に假きりしと云  
るのうらさるを憤り  
ラロエヤ一周の人を人をも  
うらみふふとぬり  
いづちや思ひ多んぬるあはれ海の方をむく  
一船の人多く死に僅るを強りし人十人斗りてカムサツカ  
呂岩〜ベトルバウスコイガワニといふ湊にてニカライ。サニダライナ  
ボウストローワあひぬ素地を乳妨を〜を余〜カニサガ  
とて海エツロエヤの地千二百里を經てヲホツカニ呂岩  
是より陸行ヲロエヤの五百千里を經カラスナヤラスコイ

毒を食く自尽すと文化九年四月の末ヨホツカヨシマの  
 ニカライ、サンタライナ、ホフストローハ 乱防の時ニセシヤ  
官君をシラセトシヤ コニパニヤ ヨホツカ  
の言ハ  
 乃支犯人エムヘトロイナ、ヘトロフとソふもの、ユノナとソふ 船ヲ石  
積込  
 の上乗一して亜聖利加のカジカへ交易を行途中ペトルボウス  
 ワカニ渡りてエシザノワカ日本より帰るに途に命を交て  
 姫秀地唐古色を乱妨一カムサツカヨシマの年又ヨシマニ来り  
 了エトロフヨシマを乱妨一 二船の  
お二人 ヲホツカヨシマ  
此ヨホツカのわいじんを  
ユワムニカライナホリとソふ いろいろある不そ尾ヨシマのゆき  
 入れヨシマの初を定めて後ヨシマ昔人を附合し文化年  
 のヨシマ昔人の海を強破傷れし時次通りして玉城ヨシ  
 比時玉城ヨシマあり 敵軍の  
るるをきり ホリストスカウレワとれり



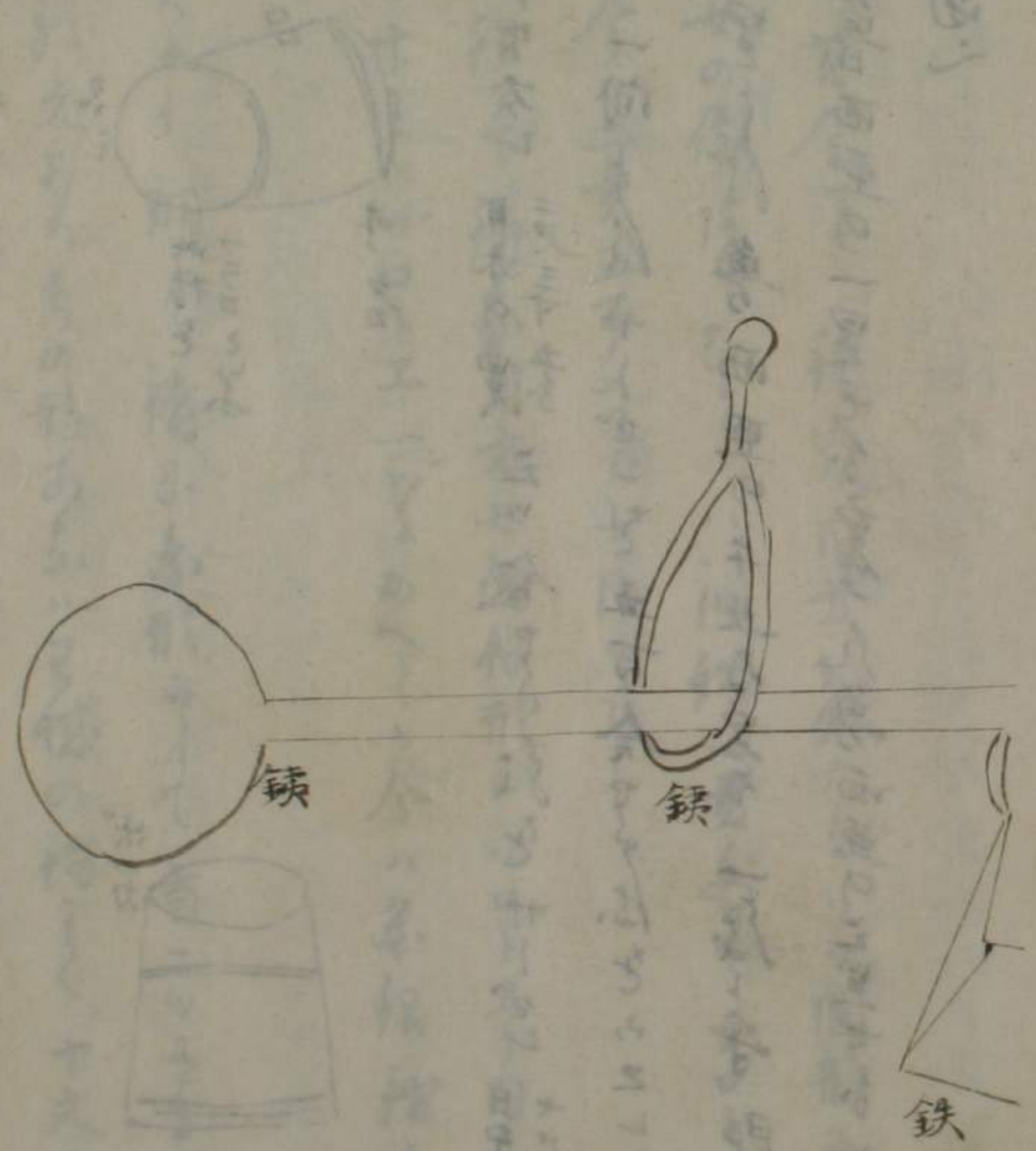
小船をとりて敵乃仲舟をヨシマヨシマ一決戦を敵兵多  
 討ありその初費ヨカヒタレレイテナレタベルヲノラレとソふ  
 友ヨシマヨシマ一船傳る船を交換し一船死をも橋乃  
 中船を不を危航をして水ヨシマヨシマ死をも不ぶり  
 カラレワカニエシセラとい小船積込乃エシマヨシマ一船二十人  
 船更地を乱妨一ヲホツカヨシマの帰りて出陣を止命して玉城  
 ヨシマの戦功ありヨシマヨシマニケマンと不友ヨシマヨシマホラストローフ  
 とソふれす  
 尺アリメン 決りて造り 四割目目をり又其内ヨシマ死  
 目をヨシマ長丁日本乃曲尺ニ尺三寸五分ヨシマヨシマアリメン  
 四乃一をニケチユウユニといふ

秤

秤は大概日本の 秤は向一が彌方圓のあり  
 入り造り 秤をよりて 秤減をこれをつらと  
 フレダ目方百は重なる 秤を九十六子刻九十六の  
 一をゾロチニカといふ 好差語あり 一モハ  
 一ツをボルツロチニカといふ 好差語あり 秤をニツ子刻  
 ムシカといふ ヲセムシカの 二の一をボルラセムシカといふ  
 フレダを四十合と 秤を ツウ下イ ボウタといふ  
 秤ベツと十二貫目位より 秤



升 日本の一升鉢をメリロと不洞を丸く造るメリロを









政令を施すと云ふイリコツカより帰る所書も形々多き  
任人言若しむと云ふるをイリコツカと云ふカビタリ記す  
人等と云ふ者も云ひきて旅人通りの役とす私用にて  
此類のものを知りて其類のものに云ふ一里の  
貸貸す文は是れ云ふお記れり付かきりの事を買ん料と  
す文々の貸貸を云ひ記すと云ひ

云へく任人は觸れはすくも云へれは所中より其類を  
任人等も往來の人等も其類書を云ふ事子種上げす  
その觸書を此州に風俗より文化五年四月の末ヨホ  
ツカの所中より其類を云ひ記す云ひてすまき  
日本の依物礼部をイリコツカの依物グビルトル、其國

より其類書云ふ六百八年に云へく日本の依物を云ひ  
其類書を思ふへくと云ふ觸りバエフと云ふイリコツカ  
ヲホツカへ交代し其カセルナトル、其國を云ひては觸り  
賣拂ひ云ひ

ヲホツカにて二人を切害せしもの刑罰は云ひて云ひ  
其而二十たき其書を云ひ入書を云ひて其工且其書を  
人等其書は云ひ記す其書といふ刑罰の人等  
云ひて云ひ其書の云ひ記す其書を建並首其書を  
繩を云ひて其の方より引物を云ひて其書を  
脊を云ひて其書を其書の其書を其書の其書を  
其と其書を其書と云ひ其書の其書を其書と云ひ





ヲホツカよりセンチタリイニ遠ハ日本の二百里餘と云ふ人  
ラストロガウツコイ 河の名 河の名は魯西亜人の出産  
家敷ニテ新斗マコト云ふ

センチタリイニヨリウツコイ河のゆうし海正を去る所ハ千  
里を去とラツコイ河のゆうしラストロガ近ニ十四五里

ウツコイよりヤコツカ近日本の三百里ヲロシヤの千三百里  
ヤコツカよりシナよりハ河の魚多シナの水の土を穢をもる  
引せりイリコツカへ行ハ路徑ヲロシヤの二千六百

ヲホツカより王城までヲロシヤの九千三百一里  
イリコツカより王城までヲロシヤの五千五百一十二里

カラフトの南ハモスクの由より流るハ河をアモルト云ふ海人

モスコウと云ふハ即モスク江也

ハ亞美利加カシカと云ふ處ハ ツロシヤ人 北の北南大東洋中

ハ モロトイ 北の北南大東洋中

モロトイハ モロトイ 北の北南大東洋中

乃曰つれのガウ男を男ハ女とわづれて六島の由ニ挙リ

任むりあり女人島といハホロモサニ六島の女挙リ

任むり イキリス 女人島といハ イキリス 女人島といハ

ジョゼフ、レセルワイの語

ジョゼフ、レセルワイハベンガル 河 河上カスミ イキリス

乃そのアメリカのカシカ島へ交易ハ行ハよるを破

ヲロシヤ船ハ役 イキリス して歸ハの系ヲホツカ

ラホツカのコシバニヤウ汗は回宿して此症をアツク

ラスヘン子一ケニガラの種痘の方出たり此方ニセキ年チイナリス  
より修くくイナリスロドレの痘盤の書指は瘡をあらう  
牛の乳を煮たり一はその牛痘を患痘の膿水瘡子入て  
かの毒瘡瘰一より考へね一とよりそ方牝牛の痘を患ふる  
倉の蔵すくふ必ず痘を患ふるを要一  
その時毛を運ぶる所は毛中の痘をえるを尋ねて手探水に取するの  
ねまぬり能死<sup>乳</sup>きくると一回一括を瘡い合セ今を同コキレ  
をぬり瘡のくくくくくの中は瘡ゆり五十五日をかりうとを  
その日をとしこれいぬる一

唐山へ行イナリスの交易は一年は六十番と云ふ  
松本の方には葉<sup>ナユ</sup>と云ふは老瘡瘡を云ふ

家コ家ふる<sup>カ</sup>鶏 白<sup>カ</sup>字鴨 インゼーカ

インゼーカは鶏形鶏尾をきくく一して唐より来た之首を  
北鶏の如一月がニセ目なともあるんを一負イニゼより  
まう一也へ其名何ると云雁マリーケグウはカイナとは今洲  
れさるといふるゆり

イリコツカのクピルサトルり定みイナリスより来る鶏尾を籠に  
オウふイナリス何れともマロミヤの語をくそりて日本  
日といふるやと云ひ一は日本國中何れもさる所あるれとも  
無量の鳥を飼ふる一と云へ一

燕<sup>ア</sup>ラシタチ五月の中旬より七月中旬に帰る形ハ此鳥の  
燕<sup>ア</sup>はわくくくるとし獨り居るそ本丸花の色をアツク

ラーニタチカとカウ斗を合をケカ、ウハ 鳥を似て也——  
ボハリ象を似たり首短く尾毛きく山鳥の如くたる雁と  
——て揚上り群り集るを本の下にきて浴池を打川  
おろし、この地を居れども群り集るものあるより飛さず  
一羽の羽を打てて取をたすまじ  
クルバツカあるを打てれば海の方より音をうけてマホラの  
来る能わす、鳩の大きなり、是のうぶも有り、音も有り、  
羽を打てると、鳥をたすまじ  
チコクシ、鷓よりちかく、鷹を似たり  
をりたり、杉木にカベ、鴨をマニマニ、グは音をたすれ、甚ハ食  
物之——き、ゆ、一、海の上を渡り、くるを、振子、呼、い、進、は、り、あ、る、を、捕、り、  
て

白グウス、家鴨、の目——く、あ、る、鳥、ふ、家、鴨、の、目、の、あ、る、を、  
き、り、膏、を、の、あ、る、を、九、焼、き、て、合、ふ、味、の、あ、る、  
ポスト、レ、ハ、ハ、西、聖、利、加、四、十、五、年、の、地、を、り、け、お、を、  
請、尼、利、亞、より、流、人、を、放、せ、り、あ、る、り、今、ハ、彼、流、人、と、い、わ、れ、  
部、落、を、あ、る、請、尼、利、亞、の、属、を、イ、キ、リ、ス、人、あ、る、り、  
拒、て、を、う、け、て、放、て、置、れ、  
請、尼、利、亞、国、戸、口、老、若、男、女、を、合、せ、り、ハ、百、餘、人、を、あ、る、り、  
近、來、拂、郎、察、と、郭、瓦、斯、と、名、を、合、し、て、請、尼、利、亞、を、攻、  
時、請、尼、利、亞、を、老、人、と、い、は、し、て、捕、郭、二、國、の、兵、を、防、  
の、り、合、を、下、す、り、ハ、ニ、三、年、あ、る、を、臺、と、い、わ、れ、  
と、防、  
と、防、



ウツツよりヤンゲチリボーイ近四五里

ヤンゲチリボーイレブレチリボーイを合戦ア カレナツヤトハ としふ十七

目の多とつふけあるのる十五六町をくそは

ヤカレハ、シウチラ、 シウチラ シウチラ の シウチラ 海嶽多 シウチラ

シムシロ カレナツヤトハ シムシロ 近十七八里

のち七八里は カレナツヤトハ の カレナツヤトハ と カレナツヤトハ の カレナツヤトハ

くとしカレナツヤトハ カレナツヤトハ を カレナツヤトハ

モトウ カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十五日の多とつふけ カレナツヤトハ とくとし

つあて カレナツヤトハ カレナツヤトハ カレナツヤトハ

うせり カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十四日の多とつふけ カレナツヤトハ カレナツヤトハ

間二里汗

ラレヨア カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十三

モトワ カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十二日とつふけ カレナツヤトハ カレナツヤトハ

テウユ カレナツヤトハ カレナツヤトハ

ラツコ カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十一

モシ カレナツヤトハ カレナツヤトハ 十日の多とつふけ カレナツヤトハ カレナツヤトハ

カレナツヤトハ

シア カレナツヤトハ カレナツヤトハ 九

アカ カレナツヤトハ カレナツヤトハ 八

チル カレナツヤトハ カレナツヤトハ 七

ハル カレナツヤトハ カレナツヤトハ 六





越夷人の子カイタニベエツキといふ事なれども越夷地を以て  
ふー名のミキクマエマキ也田徑ニ寸五分法を以  
一尺五寸より二尺七寸直せ五郎次オホツカ子孫一吋一食  
ニる本ちと行へを教を又より文化三年唐太を捕をれ  
翌卯年六月上旬イイリへ歸り一陽氏お四人を以て此  
寸のモリス細工の運一ツを貰ひ歸れり奇巧最妙なり  
五郎次ヤコツカマて榊一枚をるゑ 子く買物さう西遊の  
榊をそき榊と解榊うりいふ豈に換るりそき根のちハ  
以教中の風をさる時用ひるとさり

ジョヤフデヤルワリ信子 仰せやみミ京門けり所習イニトマメ  
タニマルバリせしつれも倉西まで傳へる葉を蓋て倉を倉

早れハその葉を拾このミ京門の ゆゑしつれも生を本を造り  
寫出する所りといりそのいれをさくる 魯西版の書を  
オホーツカマて見るゑるゑるゑるの壇よま生 の所を折て  
ひるふ回つりー

イリコツカマのクビリナトルツ家の例を云 我後所 何りといり  
セキリタレといふ 四代のもを  
夫ねおほを 秘ふヒヨットロくイチといふ  
ものゑて唐帝さる法の弁は 你是日本國又と一字の大き  
一寸法を書くるをさして何と後出といひ 少くもえ後ハ  
ニセニツホンコウジと名へーは訓後を以ふしう 時休のまちと  
と後おおくさうーりこれ日本國のくさ何す と後ーは  
日本國の何りといふ何とといふこれ 日の本のふのふとこ

所々をいひしる中の中魯西亜人目と目を見合はるる  
遊覧して日本支那の学をなすしるるものありといひ  
いとあつしるるあつしるるあつしるるあつしるるあつしるる  
つたの交易は従ひ行き来はる唐山人の船りしものあり  
といひ

オホツカの島に入ると日本支那の地銀三部十三冊あり  
日本海路の地を竊り得るを焼捨し

オホツカ島に在りし時カンサツカ島を節用集一冊を有するもの  
ありかゝるれよと流しし汗はる唯一夜の事なりといひ  
天子歴代將軍宗氏代に孫諸侯の事ありしを有するもの  
七冊を有するありて聖徳太子に在りし節用集の事あり

唐太島より奪ひしものありて王城へよるものありしを流  
しりコツカ島にて有るイナチカリヨウフの事ありし時王代孫諸侯  
所代に節用集を有するものありしを流しり  
るものありしを流しり

イリコツカ島に在りし時王代孫諸侯の事ありしを流しり  
いふ五郎流ししものありしを流しり  
より又魯西人の日本人出づの便ありしを流しり  
一冊を有するものありしを流しり  
いふものありしを流しり  
書きたるものありしを流しり

文化八年海軍地を有するものありしを流しり

海軍地を有するものありしを流しり



ヲホツカヨクイキリス人トイ斯巴ニヤ人の船軍の國をとり  
し北の連年イ斯巴ニヤの船お年かり塔塔する全船を  
載せて呂宋へ交易の行といふ噂ありしをイキリスの  
支那海上の船を奪ひ去ると遥に隔りし支那海上に  
船ありしをイ斯巴ニヤ船の奪るるを待する三年其の言  
禍これハ本西へ降り船の言を備け又彼海上に  
待居るる噂ありしをイ斯巴ニヤ船塔塔し全船を載せて  
待居りしを奪るるを船に向て大筒をおりしをイ  
バニヤ船も塔塔し奪りしを互に大筒をおりしをイキリス船  
急な風上へ奪りしを奪りしを大筒の煙を風下の船に  
敵船の帆にけり又定りしを風上の船よりイキリス船の

帆影を見定ておをしゆへ急な火船り焼せぬ全船を  
載せし船原を奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを  
船を焼捨しり奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを  
全船悉く一船の人を奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを  
奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを  
コルトこの戦の噂しつふイキリス人の強きハ決地したの  
白くもある北とも船のさしつて船塔塔して風上へ乗せ  
せり奇ありしと  
ヲロシヤ人若くは船軍の御所の時とる丸塔塔をか城し  
ものを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを  
火を燃すその官警りしを奪りしを奪りしを奪りしを奪りしを

あまきひのまらふとふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
より心はあまきひのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
より心はあまきひのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
より心はあまきひのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す

ヤコツカの戸口七郎とくとも十年改めたる後人の心は  
二る五十六軒まゝていふといふイリツカもと五郎新也  
いへとも千五郎新也といふいふいふいふいふいふいふ

て凡ヶサハ日本の辰巳のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
ヤコツカよりヲホツカへ船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
眼を射るなり土俗に船寄り船寄りのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
トシクシエの小倉のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す

くれんこふ極まるといふかたうのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
毛をひきて皮肉のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
その中の尾の針をまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
メーラはたきまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入すをひきて皮肉のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
聖徳太子のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
キタチ王唐山をひきて皮肉のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す

五郎次持帰しあまきひのまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
カイリランツケシタチ王唐山をひきて皮肉のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す  
仕立させしるる

リヨンかきそまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入すの儒半  
カニレケ日本の相師のまらふり船寄りもこれを以て敵船へ投入す

ツカ子在一時五百多を買ねり

英國國硝子器のつくまき通る色雪白ううわんせのつくまきの

中ニ寸餘丈の長サ何れともきものを絶えて容融する頂より

かふほ柄は仕立する器具なり

へカ 子キ ナイ ノカ セカ 小刀等を削る目四角の厚の

眼を削也

ガラダン箱圖を引く目四角の如き物々の如き汗ばきの

ありしを切り四角なる物を削るなり

革のまを 革のり

花を削風多々 鼻紙風多々

イギリスのカンリ 初め一年せんう御座をおさわるもの地は既

紗はあつそ日本のもんをのわくして毛のほきまの

鏡 セリナロ 其座のチヨリコル コニバス也

硝子板鏡 長さ九寸餘中ニ寸餘 魯西亜より唐山の北京イキナへ

何を備へんとて信者を遣はせし時のまを物ゆえイリコツカ

までヤキリタン故のヒヨウドロくイナふるふいりり 船中

くまいふれちくわきり

程痘の書物二冊

イギリスの刺刀

種物三種 ガボスタ カラスナイ、エニチカ クーセニヤト、ボヘレ

ガボスタを魯西亜方の菜蔬にて子の形ハ甚菁のふのつく

五月程をとりいりつる葉をきりて丸く球のつく

生立する時香より寒すはなく是五年中の會科より由  
煮ても食し塩漬もす甘味あると此より龍純紀畧は老  
鎗菜即俄羅斯菜也といふこのカラスナリ、エレチカのるる  
形も<sup>大</sup>食し胡椒の如く白き中は黄色を帯ふ時其時  
同食相お此方の大根の如くせしむるかと同くせしむる色  
多て赤く湯煮は其れを煮汁紅をとるる味は  
砂糖の甘より有りて遠くあり日本の薩摩菜よかるといふ  
グーセニヤドールボベしち此菜の名もや否哉志し其子の樽の蓋の  
ぬき層は葉の中より取りし種をわし時何より用いしものとわい  
ちんぬりよりコルトといふとの尋子しよグーセニヤ<sup>酒</sup>ドールボベ  
<sup>香</sup>とよみ<sup>香</sup>といふは<sup>香</sup>肉桂苗香採めとく科記と記すか  
レ

うかつて香気強助くるとのるる人う根を曲ひ名も  
葉は香氣あるものうをもとて

水鉄炮 外科の療法をなす道々之樹ハソーリス<sup>新</sup>バガ  
て化る五郎次傷寒症がひく時フホカの一里<sup>新</sup>おわ  
ウキこといふ所あるボリイトム<sup>痛</sup>入て療法を文しに

先角みて<sup>目</sup> ぬ此道りるる物を醫教へさし入相  
メーラをまうてと死さるる砂糖牛乳をのつ、加味  
てあか一人もさるる時多鉄炮うけふくせ殺逆中へ  
をちり入るこの苦味の入るを忘れぬとも煙草を吸  
かと有りてよく此ときこのを浮下し彼中ハ熱毒を洗  
い去るよとてなるといひて予愈守病中日々焼酎の



つを飲せりし其水鉄炮程物の底口の痰水を洗ふ  
ふつと用ゆるよりのり

五郎次持帰りしハ小方にて程物の底口を洗ふ  
と一とつと五郎次持帰りの痰水を洗ふとのハ是  
より大也偶拙蔭者伯氏康丈所著醫膳を閲する  
云新齊齋載用病不飲食有老回能醫者怒并痛  
令病者覆身以竹筒挿入穀道中将菜水乘熱灌入  
用大氣力吹之少頃腹中泊々有声拔出竹筒一泻而病  
愈矣按便秘不中用承氣輩宜用蜜煎大薑兌等者以  
西洋御箭 名聖里 秘打更 監水和蜜入箭中以箭嘴醫穀 擗  
入直腸内甚為捷速

其論の牡丹 十二

彼川痰のふとの

梯巾の角細工唐櫛の如く歯歯のさ方を敷をこころ  
用ひ細うぬふ方を敷の井此風行去るよ用由牛其角を  
能煮て開き志のふを煮て一人乾きし時櫛を換や  
チエリバーハ鼻洞の粉を入れし運より用徑守伝屋さ房  
海ごら八分ちと心々皮上ら松脂を以て塗りしつと其四し  
其蓋の上ら磁瓶申して流りつらこつ乃インヘラトんの像を並上  
ふつとつりヤコツカを以て買ふ儼じ五るふ

魯西西里一里 ワロヒヤ 乃里法 七方五るまを 三三 といふ十三里を日本  
一度おる三里を十度より子エメツル魯西西里の七里を三三  
一日本乃十里を百五十三里といふイキリスル子エメツの法

同

バラシ羊ツツカ羊の牝ヤケバラシ猪セーケハ人ニ列スル  
るものなり

諸者のドリを阿ぶらりとして林を珍重して食ふ

オホツカヤコツカ、イニコツカツつれを處女ハ於更人の妻とす

との江戸の提を此獄るといふもの、此の業成るといふ

多く一青の價風は其の一枚或は焼酎一盃り砂積り

をかりふりこの業をさしてまをすふとの阿ノ世を

さハ役人乃妻をも相成り成るよりなり

アラレツの人を而人々、二十五魯西亜を百萬ツ、三千

とテセル口活也

碇綱乃切玉を海上の合巻も鉄炮をこいて打こくは早業  
弘玉流る紙費やさぬ方なりけし綱をリヨシハダ けし 送 紙  
一節とよキヤンを牛の指をて煮火ゆか引いて糸を金  
合巻をこよキヤンを引ゆる水もむくりにてもあることあり  
てもあるものなり

カシヤツカの南の心海赤い海邊及びトルボウスコイがワニ  
といふ湊あり家数二十ありとあり魯西亜のり場中  
取るに陸をて山とよ喰るもの出るを築甚中より大  
筒も多く仕立主とけり文化十年有カホツカより商人  
ビョウドロアリキヤイ子に集りて 南部の標人ガワにて  
此とのり物りあるものをとるなり

オホツカよりカンシヤツカのベトルボウスコイカワニハ素於所々  
 大抵ハルマコタンとラシコウコウシ乃同を交るよ〜  
 カムシヤツカヨカシヤダといふ夷族あり昔々ある人數十家  
 入居あり〜  
 千人足らずヨリなりといふ政屋巴御中ノ瘡瘡カムシヤ  
 ツカヨリ傳傳せ〜とふるカスベンナイケニガ〜  
 子又也〜  
 カムシヤツカノ小ヨリヤカトレグレユノ夷族あり  
 國ノ大小強弱ヨリテそを等々取るとりイシベラト  
 ベラトハラスダレキヤリコロリノ政や世界中そを政屋巴  
 ノ魯西亞拂郎察諸厄利亞、亞細亞ノ支那日本此

イシベラトルあり其能ハニ那チヤリコロリ此故と云魯西亞  
 も莫斯奇島も都を〜  
 代ヨリヨスタレヨリイシベラトルあるといふ拂郎察巴  
 ベラトルあり〜  
 千八百八九年のイタリヤ國ノ王拂郎察ヨ  
 追出されテ西齋里亞ヘのくれ去り〜  
 瘡地ノ名

ホウシカ 大筒 ウェントカ  
 ヲロシヤヨウ 長筒 ビシトウタ小筒  
 二挺をの筒とあり名を忘れ〜又上ニ此れ〜

此口ハカ  
 ハカカカカ

筒近年イキリスより届ふ

狭の漆地び大き 厚十四分位中をうつけりて  
六分の口をこのカホツカと見たり

魯西亞ら玉も床と背ふ所の職ありてそれらの漆金

をえまゝ王のイシベラトルカーラスタレの官のたわ要部若王のさし吹の

方を騎馬の大將其吹の勢し何やんの大將を執

め王乃母を捨るを育つるを司り役令をとほら

ハオ王乃床より位より即女女もも王位より即けり剣

を帯もべーテ九組してより文化十年迄八十八年エカテリ

ナともかそくて五代といふ

モスコア申乃寺姑おをッロカグロコウフといふッロカハ四十

といふよりッロコウも四十丁を造りてはさしを四十を早合

さしとといふ千六百寺那り

ピンゲのきせは水乃泡をへすとといふへすと作らるるきせ

る球とピンゲといふ色黄陶器のめとよ見ゆれとも作り寺も

このよりきせをさしとトロフカといふ日布めき球が球

ハカンサといふ

トラチケカライ、トラチケをかはしとありては二枚のうり十まハ

四枚ツ谷を分るしておぬまをうしをみナニぬ入相を画

くホストン骨牌ニをりて四人をておボストンと書りてけり

りくれハアスと書りて命をて行馬の板解すへまじ

近年の揺りより作りぬるをけ変るをまじ

マリアス教一ツ四枚ツ、二より迄四ツ六枚ぬき、一ツより十迄  
四五二十枚ボロフカラリゴロリ三四十二枚一をトスといふ  
四枚分として三十六枚なり

シチヨテ并盤作り十折玉十ツ、十より正上の四ツと下の四ツ  
ハ白く中程ニうらな色を付十折のゆ一折むつる

ラホツカヨクハアメリカカ乃仕入物をこそと一問をさつバチ  
といふコバニ中高があらぬぬ魯西聖王よりイキリス船をぬい

たつて諸島の交易商ひをこゝろ廣くあつてめつる  
イリコルトの物語りなりこのコレバニ中此船文化申年廣太

島へ来るといふ海法にきうきういふを思ひたかたかといふ  
いひふるといふを、高船も橋の上より大筒は仕りけし

申年ある軍船をカリやうの下の一例七折ツ、二例ヨ十

四折橋の上よりげくの種は同六折仕をこ何うかきりり船

をこけりゆら大筒をむをこ免火縄を火を煮、布をぬ

水致さうえきわく下の折を板の突立並船中火を

禁するを解る者へまむるを鼻煙銃用ゆれとも火

おろ吸とりのきせれのかん骨をこの水の上より

してのむなり

カントロといふをアメリカカ、カンスコイ、カントロといひてアメリカ

カリ高いおのせ活をすはなをななり

エトモ江戸のり十五六年以来乃りりや、イキリス人といふあり

その時よく地理を足金後分を仰りて中野の今  
歐羅巴洲中著る事よのしれり魯西亜にて  
これよりして学びおりのとを海船中を度くは後  
圖をえりてエドモと志す

文化申年より不小船の名をエドモとよぶは船令一  
度よりそれよりみて寛文日本へも我は亦ぬとむと  
ヒヨウドロイウノイチイリコルト 船中よりの福之令兵の  
ぬるなり

一人別々廿五年目より不船その年限の事よはれり  
その不船よりの海をちいしに記すものも也と日本  
標民記之節も魯西亜とてわけするも文政申年より

七十文ツ、出すといひし船三郎を商人よりしれ日本  
人其身一代を海上の海賊をす

魯西亜人のアメリカ人獵り行とのふ一年間海を渡りて  
ニバヤとよとをれ其内一重五のよかぜこすへて道よる也  
跡り一貫五文を不船に借令して自分始にいて  
行五年も七年もめり仕令よる獵あれはアメリカ人を  
逐へ申へはし居り完初乃借令て捕りて捕りて  
と此も稀にあれも仕令よる獵あれはハルビヤ  
も妻も持たぬといつても借令をりくくもココバヤ  
も後迄治心を記居りて一書をすとの事  
エヒチエリ侍かきサリダテの上ヤサリダテのふもカ

ガカミカサガミ道中の遊や或々軍中より乗馬の尻  
引小舟が所は其後を尋る程之乗馬を供ふと其をよるこ  
オホツカ名てヘレカといふ少女はアツク<sup>ま</sup>吃つてその河津のよ  
びきよくひりーこの娘乃親ベレツツテテリウトフとふコッパ  
ニヤミヤとをれ穢業のたふらルツツをよみよきり左首の舟  
儲けいふ原よりベレツツテウドウツケルツツふまうし時  
日約のよの三十入るりおれよの十五年穢席三十成獲  
とつとつふ

招おのこけのこを極夷わつしづといふ島西亜といふボリス  
ニツアといふカラスナヤカタ<sup>葉</sup>の異名や日本のつげり似きとほ  
ホリヤ<sup>り</sup>もさ五六寸なる此味破くかくかり以摘取り

くろま砂糖をぬ茶葉よつと殺すも用也

モロシカ名さ五六寸おふと葉もホリりこけこつとつら  
葉をよみく候茶をりの以摘取り標法よつと著るふ  
味いし舟の葉をわつとれ腫多の良葉なり  
ウチコへよりハコツカへ約道せりて取状をく木城のこつと  
よつと細く太さハ柄茶標めくもさこさ寸をよみよ木城  
のめさつとをえつと馬ぬみて喰ふ標とんとよつとこれ  
さつとつは後すはとつと龍汝紀畧の羊草なり  
ソリ塩イリコツカのおさ十里宛アノカヲ<sup>名</sup>の何てよみよる  
こけ島の氷を焼く候といふこのおまを所よるハヤカ  
ラモウリヤ<sup>脚</sup>の<sup>の</sup>をよつとつとつと標をれと木脚のよみよつと

よはしつゝとてとよみは變り

カアコニテゾリ地中より自然に凝りたる塊より白くも  
を水晶の如く半ばは赤色石英の如く赤くも青紅色  
を有しありしれを以て器皿の形に凝りて用ひる如く  
陶器と云ふは布て意味を誤りて年を經れとも融化  
を事なり

文化八九年の以雪際並の東北より肥良的並の地より  
濃的海の内陸より奥西並又越船倉せりれりしは海は六  
十七岩路より舟よりへられし地より一きと又て是は  
せきしひふ

南幹牙小韃靼の地よりオロシヤのおとるはを哇刺西並

乃地を二兩と人として年々戦ありしなり

北亞墨利加之古巴ハ伊斯把持並の地より今も諸厄  
利亞のおとるの諸厄利亞の人並刺比並よりこぼり人を  
自引して甘蔗を他へせ糖を相を製するものあり是糖を  
一と本よりこれ一地より採りしなり

千八百八九年<sup>文化版</sup>の以波尔社瓦尔王拂印奈王政を  
これ布不を以て南亞墨利加之内巴<sup>パ</sup>辣<sup>ラ</sup>不正<sup>シ</sup>智<sup>リ</sup>里<sup>ヤ</sup>が  
不士民として從ひ行其如く拂印奈王の弟政を以て  
諸厄利亞人波尔社瓦尔王を以てわが舟政政りは  
かとうを以て一拂印奈王を以て歸りぬその以のりるは魯  
西亞船十三艘波爾社瓦尔王の艦を以て居る政諸厄利



西人より取りしより十三艘の魯西亜人致信厄利亞船  
乃人と云ふにや入習船をも人を引はれり本國へ歸  
せぬらぬおのれ魯西亜より信厄利亞の持信標葛刺  
を攻めたり人と云ふにや入りしより南人より金標葛刺を  
攻めたり信厄利亞より魯西亜の持信標西里利  
加の船より取りしより取へりといひしより信厄利亞に攻  
めしより取りしより其の止め申の年ハ拂印奈と信厄  
利亞と大い戦ふとテセリワの語あり

松平國多良を海の時より一時的未船や一時的にられ  
の心の人といふるをすぬしと問へりといひしより行へり  
拂印奈の人ありと存ありしよりありしよりありしより

其時船中より日本の持信標たるの蒸氣を犯しきふれ  
そ指蒸氣ありて其しと拂印奈の人を比若  
とて云ふるより其の語ありしよりいひしより  
ありしよりありしより歐羅巴乃豚を食むと一  
常の人の蒸氣を喰ふ日本の持信標は蒸氣がた  
ありしより歐羅巴の豚肉も食ふしより蒸氣ありし  
よりありしよりと云ふしよりありしよりありし  
いししよりありしより日本の持信標をいひしより  
人の蒸氣を食むとありしよりありしよりありし  
らむれ

魯西亜乃麻と云ふ人の小便をぬきて飲む言此 上あり

いむりそれハ多く此荒聚り事りていむりの際  
ふ不書を筆ひて喰ふ

五郎次話畢

此書ハ五郎次ハ其述と一所多りとを案ハ真州  
南部の何ゆ色の危りてクナリ色ハホナイと云  
所ハ在る運上るの情行を記述とリ一ハ文政  
五年島而五人後本徳島を飛坊と一ハ時捕へて  
帰初と一ハ二年を記述と一ハ洛陽初と云るを記述と  
されハ五郎次ハ島而五人ハ時記述と一ハ記述と  
を書記と云る一冊子あり一を海舟と云田頼也  
と云るとして長岡村を撰へあり其日ハ一と云るハ  
ハ文化五年一壬午の九月中以作海舟と云る

口筆其郷写

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

